View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Nagasaki International University Academic Institutional Repository

長崎国際大学教育基盤センター紀要　第２巻　2019年３月　101頁～108頁

事例報告

教員養成・研修の一体的な取り組みとしての授業研究会
――「保健体育授業研究会2018」を事例として――

田　井　健太郎[1)]，河　合　史　菜[2)]，元　嶋　菜美香[1)]
亀　川　哲　弘[3)]，平　野　泰　貴[4)]，加　藤　祐　介[5)]
高　橋　浩　二[2)]，宮　良　俊　行[1)]
([1)]長崎国際大学 人間社会学部、[2)]長崎大学 教育学部、[3)]長崎県立佐世保工業高等学校 定時制、
[4)]大村市立西大村中学校、[5)]佐賀県立嬉野高等学校)

The Study of a Joint Workshop for Teacher Training
—Based on the case of “Physical Education class workshop”—

Kentaro TAI[1)], Fumina KAWAI[2)], Namika MOTOSHIMA[1)]
Akihiro KAMEGAWA[3)], Taiki HIRANO[4)], Yusuke KATO[5)]
Koji TAKAHASHI[2)] and Toshiyuki MIYARA[1)]
([1)]Dept. of International Tourism, Faculty of Human and Social Studies, Nagasaki International University,
[2)]Faculty of Education, Nagasaki University, [3)]Sasebo Technical High School (part-time evening class),
[4)]Nishiomura Junior High School, [5)]Ureshino High School)

Abstract

This study aimed to examine the joint workshop for teacher training based on the case of “Physical Education class workshop.” The workshop aimed to promote teacher training improvement for the faculty, students in a teacher training course, and active teachers. In the workshop, five faculty members, 34 students, and four teachers participated and conducted three trial teaching and reflection sessions. The results were assessed using the scale of students' formative evaluation of Physical Education classes. The main findings of the study were as follows. Significantly differences were observed in the classes with respect to the teacher and content involved. Based on evaluations of the trial teaching sessions, achievements were made in improving the practical teaching skills of the participants through active discussions.

Key words

trial teaching, teacher's training course, student's formative evaluation, long distance running, dance, softball

要　旨

本研究では、2018年５月に実施された「保健体育授業研究会2018」の事例をもとに地域における教員養成および教員研修の可能性について検討した。また、髙橋らによって作成された「形成的授業評価」を体育授業成果を知る手がかりとして適用した。

本研究会は、保健体育教職課程に属する教員、学生、現職教員の当該領域に関わる知識、実践能力の向上を図るために実施した。研究会では、二大学の教員５名、学生34名、現職教員４名が参加し、３コマの模擬授業と反省会を行った。その結果は、次のようにまとめられる。大学生を生徒役とした保健体育模擬授業では、異なる授業者、教材の授業間で、形成的授業評価の結果に有意な差異が認められた。形成的授業評価の模擬授業の評価としては、おおむね高い評価があり、また反省会においては活発な議論のもとで参加者の知識、実践能力の向上に一定の成果をみることができた。

キーワード
模擬授業、教員養成課程、形成的授業評価、長距離走、ダンス、ソフトボール

1．はじめに

中央教育審議会（以下中教審）は、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）（平成27年12月）」の中で、教員の養成・採用・研修の一体的な改革について言及し、今後の課題について提言を行った（中教審［2015］）。その中で、大学の教職課程における学びである教員養成の段階は、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学習」を行う段階と位置づけられている。他方で、教員研修においては、「国、都道府県、市町村、学校など研修の実施主体が大学等を含めた関係機関との有機的連携を図りながら、教員のキャリアステージに応じ、教員のニーズも踏まえた研修を効果的・効率的に行う」ことも課題として挙げられている。この２つに教員採用を加えた３つの教員の資質向上に向けた改革に対しては、各自治体の教育委員会、学校現場、そして教員養成課程を持つ大学の連携が不可欠なものと言える。

2017年度には、長崎県内において保健体育教員を養成する教職課程を設置する高等教育機関である長崎大学と長崎国際大学の２大学によって、長崎国際大学・長崎大学保健体育授業研究会を開催した（田井［2018b］）。研究会後においては、研究会に参加した教員養成段階にある学生、教員養成を行う研究・教育者にとって有意義なものであったことが確認され、今後は現職教員にとっても授業研究会が有益である可能性が検討されていた。その結果、2018年度には、大学の学生および教員スタッフに加え、現職教員を交えた授業研究会を実施した。本稿では、教員の資質向上についての一体的な改革を見据え、「保健体育授業研究会2018」の事例をもとに、地域での教員養成および教員研修の可能性について検討する。

2．研究方法

2.1　研究会の概要

研究会の目的を、保健体育科教育法を担当する教員の研究・教育の交流および推進、教職課程学生の保健体育科教育に関わる思考力・判断力・表現力、実践能力等の向上、地域の現職教員の授業能力向上および最新の研究成果の理解と設定した。目的については、事前に参加する大学教員、学生、現職教員に説明し、趣旨に賛同する者の参加を募った。

2.2　実施日程・場所

研究会は、平成30年６月９日㈯に実施した。研究会の実施場所は、長崎国際大学（長崎県佐世保市ハウステンボス町）の体育館を利用した。模擬授業は、体育館で行い、各授業反省会、全体討議についても体育館を利用した。

2.3　参加者

研究会への参加者は、中学校教諭及び高等学校教諭免許教職課程（保健体育）に配置される保健体育科教育法を担当する教員５名、教職課程（保健体育）に所属する学生34名、高校生２名、現職保健体育教員４名であった。内訳は次の通りである。また、下記以外にも地域の元教員が一部参加し、参加学生に対して講評を行った。

- Ａ大学教員３名
- Ｂ大学教員２名
- Ａ大学学生　34名（２年生12名、３年生18名、４年生４名）
- Ｃ高等学校生徒２名（３年生２名）
- 現職保健体育教員　４名（中学校１名、高等学校３名）

2.4　実施スケジュール

研究会は、開会式、模擬授業３単位時間および授業反省会、全体討議、閉会式をもって構成した（表１）。開会式では、研究会実施趣旨・スケジュールの説明、教員の紹介、評価尺度や動画撮影の説明および研究利用への同意確認を行った。全体討議では、授業計画、授業展開、および授業研究会への感想、

表１　保健体育授業研究会2018スケジュール

7:00		スタッフ集合	
8:15		受付開始・研究会準備	
9:15	20	授業研究会開会　教員紹介・趣旨説明・スケジュールの確認	
9:35		模擬授業①　　（中学生対象50分授業・授業者：A大学３年生）	生徒役29名
	50	陸上競技：長距離走	観察者
10:35	10	**生徒役対象授業満足度シート、観覧者も含めたコメントシート記入**	**ビデオ2名**
10:40	20	授業反省会①　　グループディスカッション	
11:10		生徒役、観察役、教員が混ざった4グループを形成	
	15		
11:30		模擬授業②　　（中学生対象50分授業・授業者：A大学２年生）	生徒役30名
	50	球技：ソフトボール	観察者
12:10	10	**生徒役対象授業満足度シート、観覧者も含めたコメントシート記入**	**ビデオ2名**
12:15	20	授業反省会②　　グループディスカッション	
12:50		生徒役、観察役、教員が混ざった4グループを形成	
	40	昼食	
13:30		模擬授業③　　（中学生対象50分授業・授業者：B大学 教員）	生徒役38名
	50	ダンス：創作ダンス	観察者
14:20	10	**生徒役対象授業満足度シート、観覧者も含めたコメントシート記入**	**ビデオ2名**
14:25	20	授業反省会②　　グループディスカッション	
14:55		生徒役、観察役、教員が混ざった4グループを形成	
	10		
15:05	30	全体討議	
15:30		閉会	
16:00		片付け	
16:00		解散	

写真１　開会式

意見を参加者で共有した。

模擬授業では、陸上競技領域の中から長距離走、球技領域の中からベースボール型ソフトボール、ダンス領域の中から創作ダンスを教材として扱った。便宜上、本文、表においては、長距離走、ソフトボール、ダンスとそれぞれ記載する。

２.５　模擬授業

模擬授業は、Ａ大学の教員養成課程（保健体育）所属学生のうち２名、Ｂ大学の保健体育科教育科目担当教員１名が、中学生を対象とした50分授業を実施した。学生が担当した授業では、授業支援者１名を設定し、生徒役は29～38名のクラスとして配置した。その他に、動画撮影、観察者を配置し、大学教員、現職教員も生徒役、観察者として参加した。

学生の授業計画の作成にあたっては、保健体育科教育法を担当する教員が事前に指導を行い、安全確保のため必要に応じて予備授業を行った上で、研究会の模擬授業を実施した。

写真 2　模擬授業 1（陸上競技：長距離走）

写真 6　模擬授業 2（球技：ソフトボール）

写真 3　模擬授業 1（陸上競技：長距離走）

写真 7　模擬授業 3（ダンス：創作ダンス）

写真 4　模擬授業 1（陸上競技：長距離走）

写真 8　模擬授業 3（ダンス：創作ダンス）

写真 5　模擬授業 2（球技：ソフトボール）

写真 9　模擬授業 3（ダンス：創作ダンス）

2.6　模擬授業反省会

模擬授業実施後には、生徒役、観察者別の授業評価シートに後段に示す授業評価尺度および自由記述を記入させ、その後模擬授業に対する反省会をそれぞれ20分実施した（日野［1996］）[1]。各模擬授業の実施後に４グループ（１グループ10名程度）の編成で授業に対する反省会を行った。各グループは、学年、学生・大学教員、現職教員をおおよそ均等にわかれるように編成し、反省会毎に構成を変えた。またグループ構成は、可能な限り授業担当者（主担当、TT）、観察者が分かれるように配慮した。反省会の進行方法は、各グループの大学教員または現職教員に一任し、ファシリテーターを教員が担当するグループ、学生がファシリテーターを担当するグループなど進行方法は多様であった。

各模擬授業の実施後には、単元計画及び学習指導計画案を配布し、授業担当者及び生徒役には「形成的授業評価（10項目）」、「授業を受けての感想（省察）」、各反省会の実施後には「反省会を終えての感想（省察）」を記入させた。動画撮影者を含めた観察者には、各模擬授業の実施後に「観察者用授業評価（16項目）」、「授業を受けての感想（省察）」、各反省会の実施後に「反省会を終えての感想（省察）」を記入させた（田井［2018c］）。

2.7　生徒役による授業評価

模擬授業を受けた全学生に対して授業終了後すぐにアンケート調査を実施し、当該模擬授業に関して評価をさせた。調査表は、高田、小林、髙橋、長谷川によって作成改良された形成的授業評価を用いた（高田［1979］，小林［1978］，髙橋［1991］，髙橋［1994］，長谷川［1995］）。本評価は、体育授業の目標や内容に対して、生徒がそれらの内容をどれだけ習得できたかを適切に評価するために作成されたもので、これまで多くの授業研究で用いられた尺度である。形成的授業評価は、４次元９項目からなる尺度であり、因子には「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」の４つが示されている。これら４つの

写真10　模擬授業反省会

写真12　全体討議

写真11　模擬授業反省会

写真13　講評

評価観点は、現行『学習指導要領』が示す評価基準である「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」、「知識・理解」に符合することや、体育の目標構造、学習領域構造にも対応していることが指摘されている（髙橋［1989］，Crum［1992］，長谷川［1995］）。

回答は、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」までの5件法で行った。データ処理には、「はい」に5点、「はい」と「どちらでもない」の間に4点、「どちらでもない」に3点、「どちらでもない」と「いいえ」の間に2点、「いいえ」に1点を与えた。これまで、3件法は小学校中学年まで、4件法は、小学校高学年以上に対して誤った回答を避けるために用いられていたが、本研究においては、対象が大学生であることから、より詳細な評価を得るために5件法を採用した（田井［2018a］）。

2.8　データ解析

全てのデータ解析は、SPSS ver.25 を使用し、有意差検定として、一元配置分散分析を算出し、有意差が認められた場合は post hoc test として Tukey 補正による多重比較を行った。有意水準は危険率5％未満とした。

2.9　倫理的配慮

倫理的配慮として、調査等の実施前に書面等をもって保健体育科教育法の授業担当教員および共同研究者が授業研究会の実施内容を説明したうえで、参加者に本調査への参加を依頼し、全員から承諾の確認を行った。なお、事後のいつでも同意撤回することができること、調査結果を個人が特定されないよう加工した上で使用することを説明した。

3．結果および考察

表2は、実施された3授業の形成的授業評価の平均値および各授業の形成的授業評価に対して一元配置分散分析を行った結果を示している。

下位因子毎に結果をみると、「感動の体験」（$F(2,89)=4.77, p<.05$）では、ダンスがソフトボールに対して有意に高かった（$p<.01$）。「楽しさの体験」（$F(2,89)=14.44, p<.01$）では、ソフトボールとダンスが長距離走に対して有意に高かった（$p<.001$）。「自主的学習」（$F(2,89)=4.28, p<.05$）では、ソフトボールとダンスが長距離走に対して有意に高かった（$p<.05$）。「めあてを持った学習」（$F(2,89)=5.05, p<.01$）では、長距離走がソフトボールに対して（$p<.05$）、ダンスがソフトボールに対し有意に高かった。（$p<.01$）「総合満足」（$F(2,89)=5.05, p<.01$）では、ダンスが長距離走（$p<.01$）とソフトボールに対して有意に高かった（$p<.001$）。

これらの結果から、ダンスの授業が他の授業に対して、高い評価を得ていることを表し、授業間の評価に差異があることが確認される。3つの模擬授業者は、それぞれ3回以上の模擬授業経験と20回程度の模擬授業参加経験をもつ担当者（長距離走）、模擬授業体験2回目の担当者（ソフトボール）、中学

表2　形成的授業評価の結果

	下位項目	因　子	全　体（N＝92）		①長距離走（N＝29）		②ソフトボール（N＝27）		③ダンス（N＝36）		F値	p	多重比較
			M	SD	M	SD	M	SD	M	SD			
1	感動の体験	成果	3.76	(0.76)	3.83	(0.60)	3.41	(0.80)	3.97	(0.77)	4.77	*	③＞②
2	技能の伸び	成果	3.74	(0.96)	3.66	(0.90)	3.52	(1.05)	3.97	(0.91)	1.93	n.s.	
3	新しい発見	成果	3.98	(0.81)	4.21	(0.68)	3.70	(0.78)	4.00	(0.89)	2.82	n.s.	
4	精一杯の運動	意欲・関心	4.60	(0.54)	4.66	(0.48)	4.52	(0.64)	4.61	(0.49)	0.47	n.s.	
5	楽しさの体験	意欲・関心	4.36	(0.75)	3.83	(0.80)	4.52	(0.64)	4.69	(0.53)	14.44	***	②,③＞①
6	自主的学習	学び方	4.03	(0.79)	3.76	(0.79)	3.96	(0.81)	4.31	(0.71)	4.28	*	③＞①
7	めあてをもった学習	学び方	3.89	(0.84)	4.00	(0.65)	3.48	(0.89)	4.11	(0.85)	5.05	**	①,③＞②
8	なかよく学習	協力	4.62	(0.57)	4.59	(0.50)	4.44	(0.70)	4.78	(0.48)	2.81	n.s.	
9	協力的学習	協力	4.28	(0.91)	4.14	(1.03)	4.11	(0.85)	4.53	(0.81)	2.23	n.s.	
10	総合満足		4.11	(0.60)	4.04	(0.35)	3.74	(0.59)	4.46	(0.56)	14.75	***	③＞①,②

***：$p<.001$　**：$p<.01$　*：$p<.05$

校・高等学校教諭専修免許（保健体育）をもつ保健体育科教育法担当大学教員（ダンス）が担当した。ここで得られた形成的授業評価の結果は、これまでの授業経験に基づいたものである可能性があり、教職課程学生は、より多くの授業担当や授業参加の経験を積む必要を改めて認識する。

体育授業では扱う教材（単元）によって、児童・生徒による評価に差があることが明らかにされているが（長谷川［1995］）、本研究が対象とした授業は授業者が異なるため、教材間の差については考察することができない。しかしながら、同様の属性をもった対象者をもとにした研究においても、ダンスを教材とした授業が高い評価を得たことが報告されており（田井［2018a］）、ダンス領域の教材としての受講者満足度に対する影響については引き続いて検討する必要がある。

対象とした模擬授業全体をみると、「精一杯の運動」、「楽しさの体験」、「なかよく学習」などの項目について、非常に高い値を示しており、対象とした模擬授業では多くの運動量が確保され、仲間と協力しながら楽しい運動体験をもったことが伺える。

4．ま　と　め

本稿では、教員の資質向上についての一体的な改革を見据え、「保健体育授業研究会2018」をもとに地域での教員養成および教員研修の可能性について検討した。当該授業研究会においては、3授業間で形成的授業評価に有意差がみとめられた。

しかしながら、よりよい授業法の確立に向けての研究成果としては課題が残る。本研究で比較検討した各授業は、授業実施者、使用教材（実技領域）、授業内容、実施時限（同日開催のため）など複数の要因が、授業評価に大きく影響したことが考えられる。そのため、考察対象とする要因を、授業者、使用教材、授業内容などに限定することができず、よりよい授業に向けての検討を深化することができなかったと言える。これまでの体育授業研究の多くは、学校現場での授業を多数集積し、対象者を均一に群分けした後に授業者の経験や使用教材などの項目で比較検討したものである。それに対し、本研究で取り扱った対象は、対象数が限定されており、精密な群分けや条件設定が施されていない検討の結果といえる。本研究だけでなく、教員養成段階の授業研究の困難さはまさにこの点にあるといえ、今後の研究方法の確立に向けては引き続き議論を続ける必要がある。具体的な方策としては、教材、授業内容を統一した上で異なる授業者によって授業を行い比較検討する方法や複数回に渡って採取データを増やした上で、授業者の経験年数や教材毎の比較を行うなどが考えられる。その結果を教員養成課程の学生と現職教員が共有し、授業能力の向上を図っていくことが教員養成・研修の一体化に繋がる具体的レベルでの第一歩となるのではないかと考える。

2017年度に実施した「長崎県複数大学授業研究会」の成果と反省を踏まえ、現職教員や高校生にも参加を促し、本研究会は行われた。学生にとっては、教育現場で教育実践を行う現職教員から、授業を評価受けることができた点で有益であった。その評価および意見は、教員養成課程を担当する大学教員にとっても示唆に富むものであり、そうした現職教員の評価や意見、学生の受け止めは、教員養成課程における授業改善へ活かされている。また、本研究会のプログラム作成にあたっては、現職教員に対しての研修意義を持たせるために、大学教員による模擬授業も実施した。教員免許更新制や教員研修があるとはいえ、現職教員の現状では、多様な教材を学ぶ機会は限定されており、同僚や教材専門家との授業改善に向けたディスカッションの場も十分ではないと思われる。そうしたことを踏まえ、学生を授業担当者とした模擬授業に加え、教員研修の意味合いを強く持たせた大学教員による模擬授業も設定した。既に中教審によって示される「大学等と連携した研修や受講した研修の単位化」（中教審［2015］：22）などの教員研修改革案を踏まえても、本事例はその運用に向けた先例となることを期待される。

授業反省会や全体討議では、学生、大学教員、現職教員それぞれの立場から活発な意見がなされ、指導目標、指導方法について継続して検討する必要があることも参加者に認識された。複数大学の教職課程担当の教員、現職教員を交えた議論は、参加者が指導観や教育方法に触れる機会となり、幅広い「授業成果に関する観察ポイント」（吉野［2004］）を獲

得できる可能性を改めて認めることになった。「教職課程の学生が学校や教職についての深い理解や意欲を持たないまま安易に教員免許状を取得し、教員として採用されている」（中教審［2015］：16）という指摘に対して、教員養成機関は真摯にその対応を示す必要がある。また、教職課程の質保証・向上のために、外部評価制度の導入も求められている（中教審［2015］：16-17）。教育現場を知る現職教員の学生に対する評価を聞く機会は、課題解決への一助となるのではないだろうか。

前出の中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、「学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて」という副題がつけられている。教育委員会、学校現場と大学は、相互の連携を密にし、教育実践の充実に努めることが求められる。教職を目指す学生と現職教員との合同研修の場は、教員の資質能力の向上に向けた解決策の一つとなるのではないだろうか。教員養成と研修が目指す達成目標は近く、その一体的な取り組みの先には自ずともう一つの課題である「採用」との関連が強くなることが予想される。

注

1）観察者評価観点の構造分析で生徒による形成的授業評価との関連がすでに認められている「意欲的学習」、「教師の相互作用」、「授業の勢い」、「学習環境」、「効果的学習」５因子に基づいて観察をおこない反省会への一助とした。授業研究会への観察者の貢献、学修成果については他稿に譲る。

参考文献

1）小林篤（1978）『体育の授業研究』大修館書店.

2）田井健太郎，河合史菜，元嶋菜美香，久保田もか，高橋浩二，宮良俊行（2018a）教員養成課程における保健体育模擬授業に関する研究　―授業場面と形成的授業評価に着目して―．長崎国際大学教育基盤センター紀要１：29-38.

3）田井健太郎，河合史菜，元嶋菜美香，久保田もか，高橋浩二，宮良俊行（2018b）複数大学による授業研究会についての一事例　―長崎国際大学・長崎大学保健体育授業研究会をもとに―．長崎国際大学教育基盤センター紀要１：123-130.

4）田井健太郎，河合史菜，元嶋菜美香，久保田もか，高橋浩二，宮良俊行（2018c）教員養成課程における模擬授業の省察に関する研究．長崎国際大学教育論叢18：31-46参照.

5）高田典衛（1979）『実践による体育の授業研究』大修館書店.

6）髙橋健夫（1989）『新しい体育の授業研究』大修館書店.

7）髙橋健夫（1991）「体育授業における教師行動に関する研究 ―教師行動の構造と児童の授業評価との関係―」『体育学研究』36巻，193-208頁.

8）髙橋健夫，長谷川悦示，刈谷三郎（1994）「体育授業の「形成的授業評価法」作成の試み ―子どもの授業評価の構造に着目して―」『体育学研究』39巻１号，29-37頁.

9）中央教育審議会（2015）これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について　―学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて―（答申）（中教審第184号）.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm（2018年10月20日閲覧）

10）長谷川悦示，髙橋健夫，浦井孝夫，松本富子（1995）「小学校体育授業の形成的授業評価票および診断基準作成の試み」『スポーツ教育学研究』14巻２号，91-101頁.

11）日野克博，高橋健夫，伊與田賢，長谷川悦示，深見英一郎（1996）体育授業観察チェックリストの有効性に関する検討　―特に子どもの形成的授業評価との相関分析を通して―．スポーツ教育学研究16(2)：113-124.

12）文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 保健体育編.

13）吉野聡（2004）茨城大学での実践的検討．大学・大学院における体育教師教育カリキュラム及び指導法に関する研究．研究代表者　髙橋健夫．平成13～15年度科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）研究成果報告書：94-102.

14）Crum, B.（1992）‘Critical-constructional movement socialization concept: The rational and its practical consequences’ *International Journal of Physical Education.* 29(1), pp.9-17.